

## 『グローバル天理』第11号掲載論文要旨

### **井上昭夫 「人間・生命と地球の共進化と元の理」**

「元の理」は、先端科学技術の新たな発見と興味深くも合致している。一例として、生命と地球の共進化が挙げられる。つまり宇宙も人間の脳も、カオスとコスモスのバランスと進化のうえに成立している。人間の心もまたカオスを元にして調和あるコスモスの世界へと成人する点で相照応している。

### **太田登・中井精一 「天理教原典とやまとことば(11) 原典と表現法[5] —可能表現について」**

現代語の可能表現で特徴的な、可能動詞を用いる形式・可能の助動詞を用いる形式に焦点をあてて、原典を考察した場合、五段動詞には助動詞レルが、一段動詞には助動詞ラレルがそれぞれ接続した規範的な形式をとっていることがわかった。このことから可能表現をもとに原典『おふでさき』・『おさしづ』を検討した場合、原典は近世的な語法が色濃く残映した資料と言えるかもしれない。

### **笹田勝之 「天理教における悟りの構造について—他宗教との比較を通して—(11) 第一章「知ること」について[6]」**

天理大学における学問的研究は、今日では専門化し、諸科学に分化してはいるけれども、諸学問の統合、文化の統合、文化と実存の統合、科学と価値、意味、目的の考察との関連づけが、二元論的分裂をこえて試みなければならない。

### **堀内みどり 「天理異文化伝道(11)天理教のコンゴ伝道[10]—初代会長時代〈1963-1967〉[4]」**

1964年2月のクーデター未遂。政情不安定な中左傾化するコンゴで、高井は自ら発熱を通し、コンゴ人の人間らしさに自分の偏見を反省する。同じ頃、シンバシラ嬢がミチノと改名。3月飯田着任。フランス語が話せる布教師にコンゴ人信者の期待は大きい。しかし、飯田が体験しようとするコンゴには、多方面でフランス植民地時代の悪影響が現出し、人々の心も荒廃しているようにみうけられた。

## 金子昭 「天理経営学—その歴史・哲学・展望—（11） 思想編 宗教と経済・経営[5]」

仏教の要諦は、迷いや苦悩の元になる煩悩を静めることにある。現代の企業経営や経済活動全体においても、諸々の欲念や我執を鎮静させ、足るを知る適正な人間的活動となしていく仏教経営論や仏教経済学が語られている。

## 佐藤孝則 「エコロジーの思想と実践（11） 『沈黙の春』が生まれた背景[2]」

レイチェル・カーソンは海洋生物学者として、今日の環境危機を予測するかのように、『沈黙の春』を世に送り出した。DDT に代表される農薬が人体や自然生態系に与える悪影響に懸念しつつ、そのことを理解していない社会に対して警鐘を鳴らす意味で彼女はこの本を出版した。しかし、この本が生まれた背景には彼女の一大決心があった。当時の社会には、農薬は人畜無害で社会には欠かすことができない化学薬品、という肯定的な評価があった。そのような中で、この評価を覆そうとする本の出版は、ベストセラー作家の名声を失いかねない程のリスクを負っていたはずである。

## 金子珠理 「ジェンダー女性学情報（11） ケアの倫理[1]」

道徳言語における周辺化された声の一例として、キャロル・ギリガン(Carol Gilligan)の『もうひとつの声』(*In a different Voice*)を扱う。そこで示された「ケアの倫理」をオルタナティブな道徳概念として把握してよいのかどうか、検討していきたい。

## 小滝 透「天理比較神秘論への試み（11） 人間と宗教 [2]」

今回は、採取狩猟社会から農業牧畜革命を経て変遷する時代状況をバックにした宗教の在り方について述べてみた。宗教が自らの超越性に言及するのは当然のことであるが、それは同時に時代背景と社会組織の在り方と連動していることも確かである。今回はそれを古代宗教の成立から終焉に至る過程の中で論じてみた。

## 小林正佳 「芸術・癒し・宗教（11） 「音楽」教育の「成果」」

伝統的な日本音楽は二拍子と捉えられている。しかし、そもそも「拍節」に関する考え方が、日本と西洋では違っていた。直接「音楽教育」の目的が軍国主義になかったとしても、結果として「音楽」の授業は、日本人に新しいリズム感を植え付ける上で重要な役割を果たした。

## **上杉武夫「都市の再生に向けて—アメリカ通信（11）代替エネルギーとサステイナブル都市について」**

21世紀は「エネルギー多様化の時代」と言われている。環境的経済的要求を満たす新エネルギーへの移行にはまだ時間がかかるだろうが、それは21世紀の必然的な変化だ。ロサンゼルスにおける最近の交通問題を示し、アメリカの従来エネルギー・交通システムを批判する。

## **塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信（11）ちょっと怖い話」**

ヒトの臓器を活動する異種動物の体内を経て移植する方法が開発されつつある。ヒトの遺伝子、生命はまったく新しい環境に置かれつつある。ヒトの命は大丈夫なのだろうか。

## **小椋 博 「宗教・スポーツ・賭け（11）スポーツと偶然性」**

スポーツとは偶然的存在であることを免れない人間が、勝利の不可能性をたゆまぬ訓練によって少しでも減少し、逆に可能性の拡大を目指して行う「試行」である。すなわち一つの試みであり、結果は偶然に左右されるという意味で、一つの賭けでもある。実力のあるものが常に勝つとは限らないと考えるべきであるし、これまで排除してきた偶然の作用の重要性を再考するべきであろう。その意味で今回の新聞などのシドニー五輪報道はあまりにスポーツの世界の必然性（計算され、計画通りの勝利）を強調する一面的なものであったと言わざるを得ない。